

お 名 前	性 別	卒 業 年	小 学 校	現 住 所
安形 <small>ゆうじ</small> 有司	男 性	昭 3 2 年 (1957)	富岡小	新城市

「 売られた親牛 」

(5年生当時の作文)

昭和30年発行文集「つどい」

新城町南部国語研究会発行より転載

今日はいよいよ親牛がつれていかれることになりました。5月8日に子牛を産んだので、それから親子共にかっていたのですが、とうとう親牛を売ることになりました。牛のなかがい人が毎日のように来て、すすめました。そのたびごとに、家中で相談したのですが、なかなか話はまとまりませんでした。長年だいにしでかっただきおじいさんが一番手ばなすのがおしいようでした。農はんきをひかえていますので、いっそう手ばなしがたいのです。

でも、子牛がもう大きくなってあとつぎができるのでまだいいのです。この秋だけ何とかすごせば、すぐに子牛も使えるようになるから、今までの親牛の分はみんなでしっかりやろうということに話はいっちしたのです。

「とうとう行ってしまうのか。」

となごりおしそうにおじいさんが言ったので、ぼくもなみだが出ました。なかがい人に引かれていったのですが、道々「もー！、もー！」と鳴きながら行きました。家では親牛と一度もはなれたことのない子牛が母親をよびもとめて、「もー！、もー！」と泣き続けていました。おじいさんが子牛の頭をなでて、

「おまえも今日から一人ぼっちになったなあ。えさをたんと食べて親牛に負けなないように大きくなれよ。」

と言いました。ぼくが中学へ行くころには子牛も大きくなって、ぼくとばこう（馬耕）してくれるだろうと今から楽しみにして待っています。